



図書館情報大学



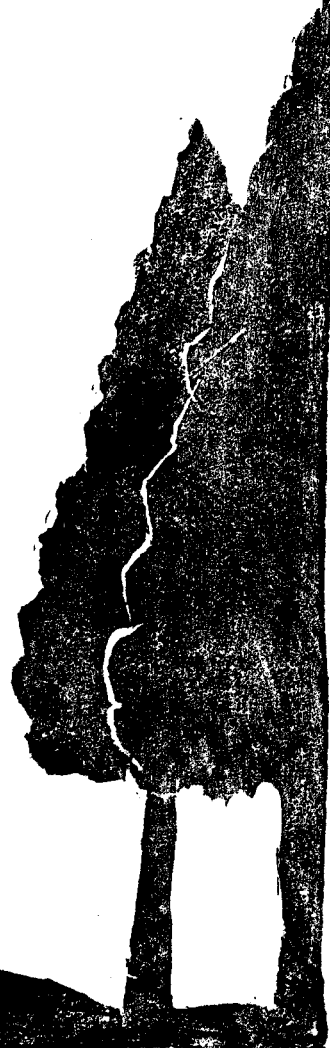
附属図書館報



Vol. 17 No. 3 2001

目次

ヨーロッパの国立図書館の変身 (植松貞夫)	2
往来物について (綿坂豊昭)	4
コンピュータグラフィックスと物理 (時井真紀)	5
附属図書館の改修整備について (丸山輝芳)	6
不思議の国ミシガンの白昼夢 (坂本昭裕)	7
図書館から	8
附属図書館日誌	8



ヨーロッパの国立図書館の変身*

植松貞夫**

20世紀末にフランス、英国、デンマークの順に、国立図書館が新館を建設した。英仏は移転新築であり、デンマークは増築ではあるが既存部を上回る面積の増築で新築に匹敵する大変身である。

1. フランス国立図書館

旧館の老朽化・狹隘化に加え、英語文化の席捲と「文化の国」の権威の失墜に対する危機感から、読書家の故ミッテラン大統領のもとで1988年に新図書館の建設計画がまとめられた。翌年の設計競技で36歳のフランス人ペローの案「パリの広場、フランスの図書館」が選ばれた。敷地がコンコルド広場と、中庭がパレ・ロワイヤルの中庭と同じ面積であることからの粋な命名である。ミッテラン氏の中世の修道院のような思索の場をという希望に最も近い案であった。実は私も日本チームに参加したが、ペローの発想力に完敗であった。1990年に着工、96年末に一般用閲覧室、98年秋に研究者用閲覧室が公開された。組織上は1994年1月に国立図書館とフランス図書館が統合されてフランス国立図書館となった。

中心部から最新の無人運転の地下鉄で約10分のトルビアック地区にある。周辺は再開発途上でいささかも文化的な雰囲気はない。木製デッキの上にL形の4本のタワービルがそびえるデザインは斬新である。タワーで囲まれた中央の地下20mに200本以上の樹木が植えられた長方形の中庭があり、閲覧室はこの中庭を取り囲む地下にある。

この図書館は一般用と研究者用の2つの別な図書館から構成されているようなもので、後者の利用証を得るには研究目的を問われる。旧館は研究者専用であり、その入館証をもつことはパリの知的スノブの憧れであったとのことである。

一般用は地下1階で合計で1556席（自由席）と開

架図書38万冊が、研究者用閲覧室はさらに15m下の地下2階に合計で2034席（予約制）、48万冊が開架で提供されている。地下2階の中庭をめぐる回廊が修道院を模した点であるが、本を置き忘れる人がいるとの理由から利用者が庭に出ることはできない。また、研究者用で肝心の閉架資料は前日までに席と同時にインターネットでの予約が必要である。

4本のタワービルは地上20階建てで、上部が書庫、下半分が事務室として使用されている。全面ガラス張りであるため外気温の影響を受けやすく、図書の保存環境としては問題がある。

コンピュータシステムの不具合、不慣れな職員によるトラブル、さらに劣悪な職場環境を理由とする職員のストなどにより、研究者用閲覧室の公開後わずか11日目から35日間全館封鎖されてしまった。

フランスの威信回復を期して建設されたのだが、現在も順調に機能しているとはいえない。設計者ペローは一度も訪れていないとのことである。

2. 国立英国図書館

英国図書館は大英博物館の図書館部として発足し、19世紀後半には世界屈指の図書館の一つに成長した。それが施設の狹隘化を招き、資料群や部局ごとの分散を余儀なくされた。組織の輻輳を解消するため、1973年に大英博物館図書館、国立科学発明参考図書館等の5機関が国立英国図書館として統合された。

一方建築では、1962年に大英博物館内に増築するというので設計者が選ばれた。敷地の制約や周囲の反対などで頓挫し、結局、76年にセントパンクラス駅横への移転新築となった。延べ面積20万㎡、蔵書収蔵力2500万冊、約3500席の壮大な当初計画は、財政の逼迫等により半分ほどに縮小された。

工事は1993年にほぼ完了したが、コンピュータシステムなどの不具合を5年もかけて解決し、97年末から99年初夏までに11の閲覧室が順次開室した。発意から30年、敷地決定から20年を要したことになる。

*Renewal of three national libraries in Europe by Uematsu-Sadao

**附属図書館長

セントパンクラス駅は、19世紀に世界の工場であった英国の工業地帯とロンドンを結ぶ玄関口として産業革命のシンボルであったが、その隣に情報革命のシンボルが建設されたのである。なお、この5年間に職員の習熟訓練が十分に行われたことはケガの功名とされる。赤レンガとスレート屋根の建築の評価は芳しくない。しかし、図書館は「実用主義に徹した英国らしい建物」と満足している。

内部では(1)閉架資料利用の座席がメインの人文科学室、開架資料をメインとする自然科学室というように、11の閲覧室のそれぞれが資料とその利用者の特性に応じた雰囲気を与えられていること、(2)閲覧室の入口までは閲覧証をもたない人でも自由に通行でき、閲覧室の出入りごとに係員に閲覧証を提示し持ち物チェックを受ける方式をとっていることが特徴である。

面接され「どうしても英国図書館でないと読めない本を使って研究をする人だけ」に5年間有効の閲覧証が無料で交付される。閲覧証があればどの部屋にも入室でき、席は自由に選べる。一般的な閉架資料はOPACで請求でき、約1時間を要して届き、請求者の机のライトが点灯して到着を知らせる。

3. デンマーク王立図書館

デンマークはヨーロッパ最強の図書館王国である。ところが、あまりにも当たり前の施設で建築家を刺激しないのか、デンマークの図書館建築のデザイン水準は総じて低い。しかし、新王立図書館は建築も秀逸で、早速「ブラックダイヤモンド」なる愛称を与えられ、コペンハーゲン市の名所の一つになっている。とりわけ、黒い大きな図書館棟と白い低層の関連施設棟が、運河に映る対岸からの眺めは美しい。

1990年代に入ってから増築が検討され、93年に設計者が選ばれた。しかし、情報革命の急速な進展を受け3年をかけて計画の再検討を、続く3年間に設計と工事が行われた。設計者選定後にかくも長い期間の見直しが許される余裕は、大いに見習いたい。

新館は図書館棟とFishと名付けられた関連施設棟から成る。図書館棟には写真博物館、音楽ホール、

展示ギャラリー、レストランや書店が設けられ、多様な文化活動を包含する施設としての陣容を整えた。Fish棟には、女性学研究情報センター、民俗学文書館、文芸・言語協会及び文学情報センターの4機関が納まっている。これらは独立した機関であるが、図書館と密接な連携のもとに活動を展開している。

新館のデザインは古典的な宮廷建築様式の旧館との対比を意識している。くすんだレンガに対して光り輝く黒色の御影石、荘厳さに対する動きのある彫刻のような造形、左右対称対非対称、そして重厚さに対し浮かび上がるような印象を与える新館という具合である。地上7層地下1層の図書館棟の内部では、中央部に設けられた全階を貫く吹抜けが圧倒的である。運河側の透明ガラスを通して水面からの反射光が射し込み明るい。主題別の5つの閲覧室には吹抜け内の廊下から入る。この廊下の水紋の広がりをおもわせるカーブも美しい。

(1)図書館機能だけから関連機関と一体の図書館情報総合センターに、(2)一部の学術研究者のものから全ての国民に開かれた、(3)閉架主体からデジタル情報時代にふさわしい装備の座席をもつ開架閲覧主体に、まさに「21世紀の図書館」を具現化したこの増築により、デンマークが図書館先進国であり続ける基盤が整えられたのである。

2000年5月には改正図書館法が公布され、改めて政府の責任が明記された。一方で、王立図書館は文化省と事業計画を実績主義方式(Result Contract)で取り交わし、毎年度ごとの実績評価により資金が交付されるとのことである。王立図書館といえども経営が重視される時代なのである。

まとめ

3国立図書館は、活字資料の大量収蔵とパソコンを活用する利用に適した閲覧環境形成のために変容を遂げた。また、いずれも電子図書館プロジェクトでは世界の最先端を走っている。モニュメント性を意識したフランス、実用性重視の英国、華麗なデザインのデンマーク、建築の現時点での評判は別れているが、後世の評価はどうなるだろうか。

往来物について*

綿 坂 豊 昭**

江戸時代に、大量に出版されたものの一つに、「往来物」と称されるものがある。もともとは手紙の模範文例集のことである。当時の情報通信手段の主要なものの一つは手紙であった。手紙は、一方的に送られる場合もあるが、普通は送られた相手に返事が出されるものである。すなわち情報が往き来することになる。往来物の「往来」とは、この手紙の往き来のことである。手紙は重要な通信手段であったため、その書き方は実生活において必要な基礎知識であった。まさに実学であったといえよう。当時庶民は主に寺子屋で初等教育がなされたが、そこでのテキストとして往来物はふさわしいものであった。寺子屋では、必ずしも手紙の書き方だけを教えていたのではなかったが、手紙をもってその代表とし、初等教育用のテキストやサブテキストを、手紙の書き方でないものも含めて往来物と称することとなった。広義の「往来物」の概念である。

今でこそ学校で採用される教科書は、大半が大同小異の内容であるが、かつては近代になっても、都市用と農村用の教科書が発行されていたように、当時は、地域や身分などに応じてテキストが編纂された。例えば「仙台状」や商人向けの「商売往来」、農民向けの「百姓往来」などである。また往来物には、「頭書」と称される頭注が付けられたものがある。例文中の語注などで、いわゆる業界用語の注といったものである。さらに挿絵が付されたものも多い。語注ならぬ「絵注」といったところか。視覚的に学習効果を高めたことと思われる。このほか様々な当時の情報が詰め込まれていることもあって、往来物は、教育、国語、文化など人文科学、社会科学の研究の資料的価値を持ち、これを利用した研究も多くなされてきている。図書館の所蔵する専門資料としても十二分に価値を有するものと思われる。

さて往来物の取り扱いで厄介な点は、まず同名異本が多いことである。また実用書であったため、保存状態の悪いものも多く、原表紙がなくなっていたり、外題簽が剥落するなどし、書名や刊年が不明なものが多々ある。こうしたものを扱う司書としての基本的なツールとしては、まず『往来物解題辞典』〔375.9:Ko-38〕があげられる。そしてこの辞典の編著者の一人小泉吉永氏は、往来物研究の第一人者であり、そのホームページ「往来物倶楽部」(<http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a.r/indexOurai.htm>)は有益な情報を提供してくれる。ともに是非一度ご覧いただきたい。

さて前置きが長くなってしまったが、図書館情報大学には往来物が64点所蔵されている。数万種に及ぶとされる往来物として、その数は微々たるものだが、司書を目指すものが、どのようなものかを直接現物にふれて知るには、ほどよく揃ったものである。しかも、この種のものとしては状態のよいものも多く、展示品としても鑑賞にたえるものであり、図書学的にも近世の出版物の特徴を知る上で有益な資料である。全体の内容については、本学院生であった高橋瑞江氏が『図書館情報大学往来物目録』〔375.9:Ta-33〕を作成しているので、それをご覧いただきたい。この種のもの目録作りの参考にもなると思われる。

また他の機関が所蔵しているものであれば、原本に掲載される挿絵等の利用は、それなりの手続き等が必要であるが、本学の学生であれば、その挿絵をデジタル化し、それを利用したグッズを作ったとしても、手続きは容易と思われる。

往来物は百年以上も前のものであるが、本学においては、活用が可能な現役の資料になりうると思われる。

*Ouraimono by Watanuki-Toyoaki

**本学教授

コンピュータグラフィックスと物理*

時 井 真 紀**

日常生活の中で、数多くのコンピュータグラフィックスを目にするようになりました。

物理の分野において、このコンピュータグラフィックスが果たす役割はかなり大きいものとなっています。pdf ファイルなどに変換された論文を Web 上で引き出すことが可能なページが近年増加しました。論文をキーワードから検索し、今自分が必要とするデータが記載されているのか判断するとき、抄録と図表から大まかな内容をみてから全文に目を通す手段をとることがあります。

例えば、結晶の電子状態を調べるとき、結晶を構成する原子名をキーとして検索すると数多くの論文を引き出すことができます。タイトルと抄録だけでは、実際どのようなデータを得ることが出来たのか知ることができないことがあります。そのとき図を見ると、どのような物理量が示されているのかを理解する助けとなります。

図が全ての結果を示すということではありませんが、視覚化して初めて見えるデータも数多くあります。金属の電子状態の計算を研究する分野において、STM (走査トンネル顕微鏡) の実験結果との比較がよく行なわれています。この STM を使うと、結晶表面の凹凸像のデータが得られます。膨大な点の数値データだけでは、実際どのような表面の構造をしているのかわかりません。計算機の進歩により、大量の点データを瞬時に表示できるようになり、構造の解析をより速くできるようになったばかりでなく、実験条件のミス等の検証もより早くできるようになったはずです。

これまでは、データを与えてプロットする例を示しましたが、得られたデータとパラメータを含む数式とをフィッティングして、そのパラメータを求め

ることがあります。このときプログラムを書き、点データを与えて数式を求める。次にその数式と点のデータを同じグラフ上に描くという行程をふみます。しかし、現在ではより簡単なプログラムを書くだけ、またはあるコマンドを入力するだけで複雑な数式とのフィッティングを行なえるソフトが数多くあります。このように数式とデータを照らし合わせることは、物理の分野に限ったことではありませんし、図式化することで理解を深め、より興味をもってもらう手段の一つとして使えるはずで

絵を描くというだけでなく、複雑で全体像のつかみ難い現象を理解するときの手段としてグラフィックスソフトを利用してみてはいかがでしょうか。

=====
ここで、より身近で使いやすいグラフィックを表示するための言語とアプリケーションをあげておきます。

データから簡単に図を描画することができるソフトの一例として：

(gnuplot)

<http://www.gnuplot.org/>

3次元画像を描画する。グラフィックスをメインとするアプリケーションを開発するのに便利な言語の一例として：

(JAVA)

<http://java.sun.com/products/jdk/1.2/ja/index.html>

(OpenGL)

<http://www.kgt.co.jp/opengl/>

簡単な数式を複雑なプログラムを記述することなく表示できるソフトの一例として：

(mathematica)

<http://support.wolfram.com/>

*Computer Graphics for Physics by Tokii-Maki

**本学助手

附属図書館の改修整備について*

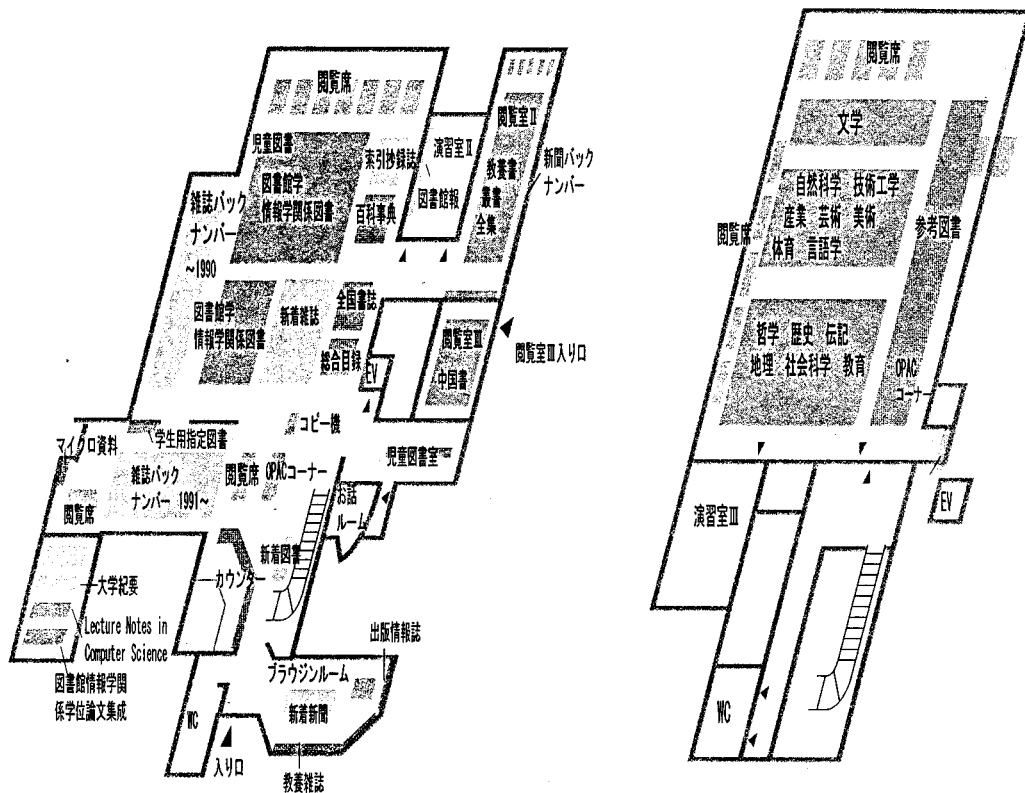
丸山輝芳**

附属図書館では、平成13年3月に竣工した情報メディアユニオン<ULIS>に、デジタルメディアの利用、電子情報の作成・編集等の機能を中心とした「デジタルメディア部門」を設けるとともに、従来の図書館に設置されていた視聴覚室、事務スペースを移転しました。これを受けて、これまでの図書館を「プリントメディア部門」として改修整備を行いました。今回の改修では、館内照明の増設、エレベータの設置、集密書庫及び旧事務室の壁の一部撤

去等を行いました。また、視聴覚室及び事務スペースを移転したことにより利用面積が大幅に拡張されたことから、児童図書室を開設するとともに固定式及び手動式移動書架を導入し、書架の狭隘化の緩和を図りました。これに関連し、資料の配置を次の図のとおり変更しました。このように利用環境を改善するとともに、サービス面についても前号でお知らせしたとおり、開館時間の延長、日曜・祝祭日の開館等拡大を図っています。

1 階

2 階



附属図書館プリントメディア部門平面図

*Renewal of the University Library by Maruyama-Teruyoshi

**情報奉仕係長

不思議の国ミシガンの白昼夢*

坂本 昭裕**

ミシガン州立大学での在外研究中に最も多く足を運んだのは、大学の図書館だった。所属先からは、研究室もあてがわれていたが、どうも居心地が良くなくてもっぱら図書館にいた。渡米して間もない頃は、言葉に少しでも慣れようとレファレンスを尋ねては、おしゃべりの練習をした。端末を使えば資料を探せるのにわざわざ人を捕まえて尋ねるのである。「What? Oh, Ok!!」と気軽に応えてくれる。たまにキツイおばさんに出くわすこともあった。めがねを鼻の頭辺りまで下ろし、上目使いに僕を見て「Ha?」と一言。意気消沈した。

図書館には、お気に入りの場所があった。それは「サイバーカフェ」と呼ばれる、カフェテリアだった。カフェテリアは、端末のコーナーに加えてリラックスしてくつろげるソファがあった。静粛でクリーンな図書館にあってここは比較的大きな声でおしゃべりもできるし、食事もできる便利な場所だった。僕は、飲み物を買って窓際の席で物思いに耽けた。外の景色が素晴らしかった。オークの大木や美しい花壇があって四季折々の景色を楽しむことができた。また、小動物が多い。時折、不思議なことが起こった。ぼやっと外を眺めているとオークの大木に動く物体がある。リスである。枝から枝へと見事にサーカスを演じる。すると花壇の方を跳ねる物体がある。うさぎである。立ち止まって、こちらを伺うように、にやにやと口を動かしている。次は、うさぎのそばを猛スピードで横切る影がある。野ネズミのような小さなリスである。まだまだ続く、どこからか黒猫がやって来て、立ち止まってこっちを睨んで「Miaow」と呼んでいる。そこへショートパンツにTシャツの女の子がローラーブレードで犬を引き連れ駆け抜けていく。犬がこっちを見て笑った気がした。「いった

いどうなってるんだ。なんなんだ。ここは図書館か？」ファンタジーか？現実か？混沌としてくる。そんな馬鹿なと思いつつ、夢うつつで目をこする。同じようなことを何度か経験した。豊かな自然が「ファンタジーの世界」と「現実の世界」を繋がりやすくしている。しかもその境界が非常に薄いと感じた。こんなことは日本では経験できなかった。何か大事なものの繋がりを回復したような不思議な感覚だった。

アメリカのキャンパスでは、学生達が芝やオークの大木の傍に寝ころんで読書したり昼寝している風景を目にする。豊かな自然と昼寝。日頃から猛勉強するアメリカの学生達の「癒し」の風景に思えた。きっとファンタジックな夢でも見ているのだろうと想像した。そうでもしないと癒されるはずがないだろうとも思った。政治、経済、教育、研究いずれもアメリカを支える競争原理はとどまるところを知らない。予備軍である彼らの猛勉強ぶりは、僕には不自然に映った。24時間営業の図書館は学生達で溢れかえっている。深夜になってもコピー機の音が聞こえる。端末を叩く音も止まない。ここは眠れない町なのかもしれない。そんな不自然な彼らは、自分の自然を取り戻すためにオークの傍で眠るのだ。オークだけではない、動物たちも彼らの傍にいる。そうすることで、日常途切れてしまっている何かを繋ぎ直しているように思える。

ふつう夢は、夜見るものである。しかし夢さえ見る余裕がない彼らは、昼さりの午後に少しだけ見ている。オークの大木や動物達に囲まれて。不思議の国のアリスがうさぎの穴に飛び込む夢かもしれない。自分を取り戻すための白昼夢。これもアメリカンドリームと呼ぶのだろうか。

*A daydream of wonderland Michigan, by Sakamoto -Akihiro

**本学講師

雑誌製本作業を開始しました

9月から来年3月にかけて、2000年発行分を中心に雑誌の製本作業を行ないます。期間中はご不便をおかけしますが、ご理解下さるようお願いします。

購入雑誌の休刊・終刊について

Vol.17No.1に平成13年度の購入雑誌について掲載しましたが、それ以外に終刊及び休刊の雑誌がありますので、お知らせします。

1. アサヒグラフ (休刊)
2. 教育と情報 (休刊)
3. 経済学文献季報 (終刊)
4. 知的財産権関係民事・行政裁判例集 (休刊)
5. 文献ジャーナル (終刊)
6. Bit: コンピュータ・サイエンス誌 (休刊)
7. SCIAS: サイアス (休刊)



- 6.27-28 第48回国立大学図書館協議会総会(於北海道大学 附属図書館長, 図書館情報課長出席)
- 6.29 資料選定専門委員会開催(平成13年度第2回)
- 7.9-27 平成13年度大学図書館職員長期研修開催
- 7.30-8.23 平成13年度学校図書館司書教諭講習開講

編集後記: 7月が極端に暑く、8月が初秋を思わせる異常な天候の中、今年の夏も大学図書館職員長期研修と学校図書館司書教諭講習を連続して実施しました。

さていよいよ待望の秋が到来しました。勉学の秋、スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋。人にはそれぞれ違う秋がありますが、秋という季節には雑念を振り払い、何かに集中できそうな期待感があります。

最新情報は附属図書館ホームページをご覧ください。

(URL <http://www.ulis.ac.jp/library/>)

編集委員会：磯谷順一，松本浩一，横山敏秋，岡田信子，渡邊 涼，樋浦真弓

図書館情報大学附属図書館報 Vol. 17 No. 3 2001年9月25日発行 (季刊)

編集・発行 〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 図書館情報大学附属図書館 ☎0298-59-1210

Library, University of Library and Information Science/1-2 Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan